

夏目漱石における家族論的研究の課題

— 文学的特質の探求をめぐる作品語彙dataの あつかいについて —

岡崎 和夫

〈要旨〉

この稿は、文学作品における家族論的な課題をあらたな観点から認定することを目的とし、作品資料の語彙的なdataを分析する。特定の作家についての使用語彙の計量的な調査は、いくつかの客観的な論の可能性を推測させる。その伝記的な事実にしたがうとき、一般に、漱石すなわち夏目金之助は、二親（両親）、とくに母に縁の薄かった作家として説かれ、いっぽう、鷗外すなわち森田太郎の実生活における父母との関りは極めて濃厚といい得ると思われる。しかしながら、漱石の、家族に関する語の出現の動向は、たとえば「父」、「母」についてそれぞれ900例ほどであり、いっぽうの鷗外の、「父」、「母」は、それぞれ200例にも満たないありようであり、漱石と比べた場合合格段に少量であることが知られる。この稿は、そうした事実をあらたに指摘しながら、家族論的な論点を具体化し、それを、作家、また作品の理解に活用するみちすじを探る目的に立ち、紙幅にあわせて、とくに、『虞美人草』の実母・実娘のありように焦点をあわせて論じた。

キーワード：家族、夏目漱石、森鷗外、『虞美人草』

はじめに

一国の辞書はその国の文化を象徴するといわれる¹⁾。一国の言語を把握して提示するいとなみのありようにその国の文化的レベルがいやおうなく示されるのはもちろんのこと、文化と言語の著しいつながりのうえに、特定の一国に用いられている、また用いられてきた語彙、語の総体が当該の国家の文化や風土、生活そのものの実質的な反映だというほどの謂いを含む言説であろうと思われる。

かつて、金田一春彦氏は、岩波新書『日本語「上」』において、日本語の語彙の特質をといった章のなかで（第Ⅲ章）、たとえば日本における四季の変化にかかわって、「歳時記」のありようにふれ、

「水ぬるむ」「山笑う」「風光る」以下、季節を表わすたくさんの単語が出てくるが、きわめて日本的な語彙だ。春の日を「日永」というのもおもしろい。「日永」をさかさまにした「永日」という言葉は中国語にもあるが、中国では夏の日の意味だという。それが日本の和歌・俳句で「日永」といえば、春のことなのは、春の日の暮れがたいのを日が永いと感じた、そこに日本人の詩情がある。日本人の季節感はこういう語によくあらわれている。短夜（＝夏の夜）・夜長（＝秋の夜）・短日（＝冬の日）、いずれもおもしろい。

と述べ、また、彼我の暦の差にもふれて、「日本の一年というのはそのように変化しているので、日本の暦とアメリカの暦の違いを比べてみると、大きなちがいに気がつく。アメリカの暦を見ると、「聖燭節」とか「聖ヴァレンティンの祭日」「ワシントン誕生記念日」というように、実にこれは人間に関する暦である、日本の暦はそうではない。日本の暦には、そういうものも載っているが、それ以外に、「立春」「八十八夜」「梅雨の入り」「二百十日」というものが並んでいる。これは季節の移り変わりを表わすもので、やはり日本人の生活をよく反映している。」と述べて、日本の季節、また暦のバリエーションについて日本人の生活のありようをよく反映していると説いている。言語・語彙と一国の自然、文化の関連としてよく納得される言説である。

こうした指摘をうけて、言語・語彙のありようが一国の文化的特質を象徴するなら、とくに、たとえば一人の作家がその作品の中に用いた言語・語彙のありようは、当該作品の特質を明示しつつ、また、当該の作家の感性、文学的特質をなんらかのかたちで象徴的に表出しているのではないかと筆者には考えられる。

1 文学作品の語彙dataについて

1-1 季節語彙……「春」「夏」「秋」「冬」

夏目漱石は、周知のように、高浜虚子が編集の任にあった俳句雑誌「ホトトギス」に『吾輩は猫である』²⁾を連載したことによって実質的な作家的出発を果たしたと考えられる。こののち、『坊っちゃん』『草枕』『二百十日』を経て、明治40年4月には東京朝日新聞に入社して職業作家となった漱石は、紙上にその第一作として『虞美人草』を発表したのち、前期三部作とされる『三四郎』『それから』『門』を書きつぎ、後期三部作といわれる『彼岸過迄』『行人』『こゝろ』を書きつぎ、また『道草』ののち、『明暗』を未完の遺作として大正5年12月9日、49歳で没している。したがって、その作家としての履歴はほぼ十年ほどであったことになる。

いま、語彙的な調査をさきだてていえば、その生涯の主要小説作品中に³⁾、漱石は、「季節」（「四季」を含む、ただし1例）という語を10例ほど用い、また、その具体である「春」（「晩春」を含む、ただし1例）「夏」（「初夏」を含む、ただし3例）「秋」「冬」（「冬木立」

を含む、ただし1例) という語をそれぞれ193例、77例、91例、58例用いている。「春」の語の使用の突出していることが明らかに知られる。

いっぽう、その時期の文豪として、しばしば、漱石と並び称されるのは森鷗外である。が、鷗外の生涯の主要小説作品中に⁴⁾、この「季節」という語の使用は5例であり、また、その具体である「春」「夏」「秋」「冬」という語の使用はそれぞれ17例、26例、20例、26例にすぎない。また、全体に少数値ながらそれぞれの語の出現のありようはほぼ拮抗的であることが知られる。いま、あくまで特定の二人の作家間のことなのありようではあるが、こうした比較によるとき、さきの漱石における「春」の突出のありようは、いよいよ鮮明になる。

そのとき、小説作品全文章から採取されるこうした出現語数のかたよりは何を意味するかと考えるべきであろうか。

漱石二十八歳時における一年間の松山滞在のおり、彼が「愚陀佛庵」と名付けた下宿での五十日余にわたる正岡子規との同居時に俳句の世界に入り、のち4年3ヶ月間の熊本時代には五高の俳句会の先導ともなった明確な経歴のなか、さきの事実思いあわせられるのは、漱石が俳人としてもよく知られていることである。『漱石全集 第十二巻』によれば、その生涯に2500～2600句ほどの存在が知られている。残念ながら、現在のところ、筆者は、漱石生涯の句を季別に調査、整理した類の業績の存在を知らず、みずからその調査に着手することも叶い得ない。そうしたデータの把握にふみ込むゆとりをいまのところ持ち得ないまま憶測的に思量されるのは、その季節のありようの実際がどのような状況を見せるかという事実への関心である。やはり、「春」の句が突出しているものであろうか。

1-2 「春」の突出と和歌史

また、「春」の突出について、かさねて思量されるのは、小説の場の描きにおいても、俳句のばあいでも、「春」という特定の語を用いなくても、季節のありようを語りつけることが可能という事実である。したがって、これらの特定の語に限定しての調査データが、

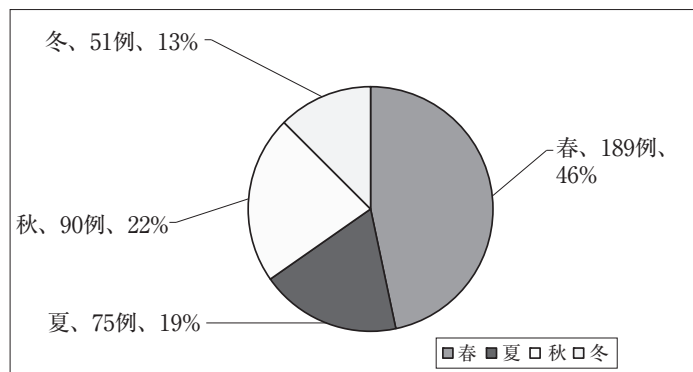


表1-a 夏目漱石

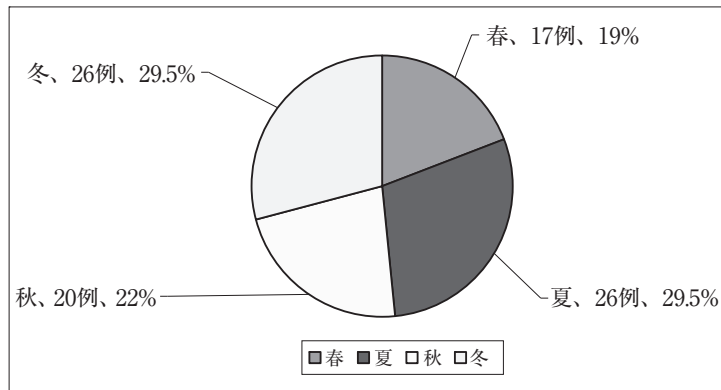


表1-b 森鷗外

作家その人の文学的特質の解明にどれほど有用であるか、そこに得られた結果がどれほどに作家の特定の季節への傾斜の度合いの様態に普遍的な数値であるか、ある程度慎重でありたいということである。しかしながら、その事情は、「夏」「秋」「冬」のそれぞれについてもまったく同様であるから、こうした特定の語に限定しての探求が現在可能な範囲での応分の現実的な処理のうちにあることは疑いのないところであろう。

そのうえで、いま、直接に、また簡略に言えば、小説作品の創り手のひとり、漱石という特定の作家の嗜好の「春」への著しい傾斜であり、こうした四季の表出のありようについておもいあわせられるのは、ひろく日本の文学の史的道標をたどってみるとき、たとえば、古代和歌の伝統が「春」と「秋」という特定の季に傾斜的に集約されていたと考えられる事実である。

たとえば、古今集において、これら四つの語の出現率は、「秋」が圧倒的（108例）であり、ついで「春」（70例）が多出し、「冬」（7例）と「夏」（8例）とはきわめて僅少である。また、新古今集において、同じように検証してみると、これら四つの語の出現率は、「秋」が圧倒的（209例）であり、ついで「春」（125例）が多出し、「冬」（15例）と「夏」（7例）とはきわめて僅少と知られる。あわせて、古今集に比べ、「春」「秋」に傾斜する例が、より顕著に見られるのである。

こうした和歌文学史的事実を、いま、かりに、日本古代の貴族文化における伝統的な美意識のあらわれと捉えるとき、さきに示したような、漱石の事実、また鷗外の事実は、それぞれの作家の季にかかわる美意識、嗜好の偏りとしてなんらかの個人的特質の反映と理解されるのである。季節にかかわる文学場ともいべきものの生成において、漱石が、春に著しい偏りを見せている事実には、相応の認知が必要であろう。しかし、いま、こうした季節にかかわる嗜好についての研究をひろくもとめるとき、こうした事実の理解に応用し得るdataやその分析的研究の類を容易に認め得ない。たとえば、認知心理学的理解に立つ研究も、同様である。この課題も、今後にゆだねざるを得ない状況にある。

1-3 「男」・「女」

また、漱石はさきにふれた『ホト・ギス』誌発表の『吾輩は猫である』（明治38年1月号～明治39年8月号まで10回断続的連載³⁾）から大正5年朝日新聞連載の『明暗』に及ぶ主要小説作品のなかに、たとえば「男」という語を1242例、また「女」という語を1840例用いている。いっぽう、さきにもふれた森鷗外は、「男」「女」をそれぞれ256例、417例用いている。それぞれの総作品中に漱石と鷗外の使用した総語数にことなりがあるのは、もちろんである。いま、ごく単純な概数の比較によれば、鷗外の総語数は漱石のその三分の二ほどの総量とみうけられるなかで、漱石のこの二つの語の使用は極めて多いと考えられる。

しかし、いっぽう、そうしたなかで、このふたりの特質的な作家の、ふたつの語「男」、「女」の使用の比率は、漱石は $1242 / 1840 \div 0.675$ 、鷗外は $256 / 417 \div 0.6130$ となり、きわめてよく類似していることが知られる。このような比率で、ともに、「女」が多用されているのである。ほぼ同時代のふたりの男性作家、あるいは作家間の使用語彙にかんするこうしたありようは、何を意味するものと考えられるのであろうか。

2 家族関係語彙data

特定の作家についてのこうした使用語彙の計量的な調査は、いくつかの客観的な論の可能性を推測させる。したがって、それ自体非常に興味深い。しかしながら、その作品、また作家の内面、いわばその文学的な特質にどう迫りうるものであろうか。そうした探求のさきがけに、筆者は、当該プロジェクトの課題として家族関係語彙の分析をテーマにしてdataの収集と分析を試みたものであるが、この稿では、与えられた紙幅の都合上、これを、とくに、「父」「母」の語に焦点を当てて開示するものである。

2-1 「父」および「父」系統語

2-2 「母」および「母」系統語

さきに示したような方法による語彙データの探求に従うとき、漱石の、家族に関する語の出現の動向は、たとえば「父」、「母」についてそれぞれ877例、963例であり、いっぽうの鷗外の、「父」、「母」は、それぞれ186例、175例であり、漱石と比べた場合合格段に少量であることが知られる。あくまでこの二人の文豪のありようの比較の結果において、漱石に、とくに「父」「母」という語へのかかわりの顕著がみとめられる。その作品例のありようは、表Ⅱ-a、表Ⅱ-bによって示すとおりである。

これに加えて、いま、「父親」「母親」、また、とくに『それから』『行人』『明暗』などに多用されるところの「お父さん」「お母さん」、また、『虞美人草』に多数みとめられる「おとっさん」「おっかさん」、ほか、父、母それぞれに関連するいくつかの語をも合わせてそ

表Ⅱ-a 夏目漱石

	父	母
倫敦塔	1	0
吾輩は猫である	0	9
薔露行	9	0
坊っちゃん	0	11
草枕	4	0
虞美人草	25	144
三四郎	1	42
それから	217	10
門	25	3
彼岸過迄	45	208
行人	211	344
こころ	262	165
明暗	77	27
合計	877	963

表Ⅱ-b 森鷗外

	父	母
舞姫	8	24
文づかひ	2	2
半日	2	2
キタ・セクスアリス	1	3
青年	1	10
雁	5	0
かのように	13	0
阿部一族	12	11
安井夫人	14	2
山椒大夫	7	17
最後の一句	7	8
洪江抽斎	114	96
合計	186	175

の実数を作品別に一覧すれば、次下表Ⅲ-a、表Ⅲ-bのようである。

3 漱石の父母関係

3-1 作家の伝記的な事実

その伝記的な事実にしたがうとき、一般に、漱石すなわち夏目金之助は、二親（両親）、とくに母に縁の薄かった作家として説かれている。この稿にも、のちに、『硝子戸の中』の本文についてふれるとおりである。いっぽう、鷗外のばあい、鷗外すなわち森林太郎の実生活における父母との関りは極めて濃厚といい得るとおもわれる。その出生から少年時に至る津和野時代はもちろん、寄宿生活、また留学生活、またそのご二ヵ年ほどの千駄木生活を経て、明治25年以来終生の住処とした観潮楼は、父母がみいで、父母とともに暮らした地であった。

しかしながら、ここにみるように作品の中で「父」「母」を登場させる文学場ともいべきものの総量において漱石のほうが鷗外の場合よりはるかに多いことが知られる。一見のうえに相反するととらえ得るこのありようは、実生活と創作とのかかわりあいにおけるいかなる事情をどのように反映したとみるべきものなのであろうか。あるいは、鷗外の実生活状況を基準に、漱石における実生活上の縁の希薄さが、父母への心的なかかわりについての願望のようなかたちで反映しているとみとめるべきものであることも推測される。文学

表Ⅲ-a 父関連の語彙

夏目漱石

	父親	お父さん	お父様	おとっさん	おやじ
倫敦塔	0	0	0	0	0
吾輩は猫である	0	0	1	0	10
薙露行	1	0	0	0	0
坊っちゃん	0	2	1	0	21
草枕	0	0	0	0	0
虞美人草	0	1	7	57	25
三四郎	0	0	0	4	3
それから	1	56	5	1	41
門	0	1	1	0	5
彼岸過迄	0	9	0	0	0
行人	0	47	0	0	2
ころ	2	27	0	0	1
明暗	0	52	14	0	2
合計	4	193	27	62	110

おやじ（阿父、阿爺、父、亡父、親父、親爺、爺、おやじを含む）

表Ⅲ-a 母関連の語彙

夏目漱石

	母親	お母さん	お母様	おっかさん	おふくろ
倫敦塔	0	0	0	0	0
吾輩は猫である	3	2	5	6	3
薙露行	0	0	0	0	0
坊っちゃん	0	3	0	5	1
草枕	0	0	0	0	1
虞美人草	1	2	0	53	1
三四郎	0	0	0	19	0
それから	0	0	0	4	0
門	0	1	1	1	0
彼岸過迄	1	16	0	2	0
行人	0	45	1	0	0
ころ	3	15	0	2	0
明暗	1	12	3	0	0
合計	9	96	10	92	6

おかあさん（御母あさん、御母さん、お母あさん、お母さんを含む）

おふくろ（御袋、御袋様を含む）

表Ⅲ-b 父関連の語彙

森鷗外

	父親	お父さん	お父様	おとっさん	おやじ
舞姫	0	0	0	0	0
文づかひ	0	0	0	0	0
半日	0	9	9	0	0
キタ・セクスアリス	8	1	52	0	1
青年	0	0	0	0	4
雁	31	0	0	13	8
かのように	0	6	5	0	1
阿部一族	0	0	0	2	0
安井夫人	0	0	2	0	0
山椒大夫	0	0	6	1	2
最後の一句	0	0	0	8	0
洪江抽斎	0	2	1	1	0
合計	39	18	75	25	16

おやじ（親父、親爺を含む）

表Ⅲ-b 母関連の語彙

森鷗外

	母親	お母さん	お母様	おっかさん	お袋様
舞姫	0	0	0	0	0
文づかひ	0	0	0	0	0
半日	0	3	23	0	0
キタ・セクスアリス	11	0	53	0	0
青年	1	0	0	0	0
雁	2	0	0	1	0
かのように	0	0	8	0	0
阿部一族	0	0	1	1	1
安井夫人	5	0	1	0	0
山椒大夫	12	0	8	0	0
最後の一句	0	0	0	0	0
洪江抽斎	1	0	2	0	0
合計	32	3	96	2	1

作品の語彙dateの解析にかかわる課題のひとつとなることからはずである。

3-2 「母の不在」と「父の不在」——佐々木充氏の論から

こうした課題へのアプローチのために、研究史をふりかえると、佐々木充氏に、ふたつ、漱石の作品中の父母に関する課題にふれた出色の論がみいだされる。ひとつは、「母の不在 父の不在——漱石小説の基本設定——」(「千葉大学教育学部紀要第36巻・第1部、1988, 2, 20」)であり、ひとつは「親のない子供の物語—『虞美人草』と『ころも』—」(「千葉大学教育学部紀要第37巻・第1部、1989, 2, 26」)である。

佐々木氏は前者の論で漱石作品における「両親の不在」という顕著な特質について総体的にふれている。各作品における実父母の死亡率を算出して「実母の死亡率は49%で2分の1、実父の死亡率は36%で約5分の2にまで上る。つまり、作者は、中心人物については、より高率に、早く母・父を失なうという趣向・設定を採用しているという事実がはっきりするのである」と指摘し、きわめて客観的な切り口を呈示している。また、厚生省(現在の厚生労働省)刊行の「生命表」dataとの比較によって「漱石の小説における母ないし父の死亡は、当時の生活者の、生活感覚の平均的な現われなのではなく、漱石の小説家としての意識ないし無意識に出でた発想法・創作方法の反映であると考えるべきだということになる。」と指摘している。そして、後者の論でその典型例『虞美人草』と『ころも』を特立してその詳細な分析を試みている。

佐々木氏は、後者の論の中で、

甲野家当主の、物語以前の死という設定あってはじめて、小野・藤尾の出会いの意味を持ち、謎の女は謎の女たり得、「退る国」(一)を慕う甲野は望み通り色相世界を脱却する契機を掴み得るということになる。信愛の問題や家産の問題が、問題たりうるためには、その前提に、父親の死という要件が横たわっていなければならないのであったのである。

とし、また、

そのような視点に立てば、親なる存在の死、それも物語開示以前の死は、甲野家当主の死だけでないことに気づくことになる。宗近家では逆に、母なる人がかなり以前から不在のようであるし、井上家でも五年前に小夜子の母が死んでいる。小野を井上家の準家族とみなすのは、父母を共に早く失って、物心両面で井上家の庇護の下にあったからである。また、甲野は、近く父を失っただけでなく、異母妹の藤尾とは三つ違いでしかないから、その人の記憶はなかろうが、乳児の頃に生母を失っている。甲野を中心に『虞美人草』を見ればこれは継子譚である。竹盛天雄氏は「二つの『退る』もの」(「国文学」昭和49年11月)で「継子いじめ譚」といわれる。『虞美人草』の世界を作る青年たちは、一人の例外もなく、早く親と死別しているのである。

と評していただける。いま、この作品の読みを確かにするその慧眼にみちびかれつつ、しかし、この稿の筆者には、甲野家、宗近家、また井上家のそうしたありように対するに、藤尾と藤尾の母という、いわば対立概念のようなものの重さは重要であると思量される。すなわち漱石は、早く実母を失くしたグループのいっぽうに、実母娘のグループを設定して、やがてその娘が先に亡くなって実母があとに残るという意外な構築を示しているのである。

『虞美人草』を「親のない子供の物語」の典型例という一本の縄目で把えようとするとき、しかしながら、そのいっぽうにおいて、藤尾とその実母という存在の、この作品の動向をしたたかにぎゅうじるほどの強固なありようを等閑視することはできないと考えられるのである。

また、子が死んで母が残るという設定の意外性ととも、「父母の不在」を特質とするとされるこの作品が実はおおくの「母」「父」の使用例を見せる事実を等閑視することはできないと考えられる。「母」系「父系」を含めたきわめておおくの使用例を考えればなおさらである。

先蹤のこうした「父母の不在」の指摘にしたがうとき、漱石作品のうちに明らかに認められるさきに示したようなdataは、どのように理解されるべきものであろうか。漱石作品における父母関係語彙の多量なありようは、佐々木氏の指摘にかかる「父母の不在」とどうかかわることがらなのであろうか。いま、この稿には、紙幅の制約を考慮しながら、佐々木氏が漱石における「父母の不在」の典型的な作品とされる二作品のうちのひとつ『虞美人草』について、その相反するとも考えられる事情の検証を試みる。

4 『虞美人草』のdata分析

4-2 『虞美人草』のなかの「父」「母」

「父母の不在」の典型的な作品とされるこの『虞美人草』のなかに、「父」「母」の語はそれぞれ25例、144例と比較的おおくみいだされる。そして、さきに示した表2によると、『虞美人草』という作品は、実は、この稿の筆者の調査の対象としたところの、『薙露行』にはじまり『明暗』にいたる夏目漱石生涯の主要作品群中「父」「母」およびその系統の語の多出し始める最初の作品であることが認められるのである。これにさきにふれた「父」系統語、「母」系統語を加えれば、さらに、それぞれ、90例、57例を加算すべきことになり、都合115例、201例を数えることとなる。なお、『虞美人草』には「父母」の異語形・異表記形として「ふぼ」も「ちちはは」も一例も登場しないが、ここにみる多量の数値は、佐々木氏による「父母の不在」という指摘にいったいどうかかわるものなのであろうか。あるいは、登場する人物に既に父母が亡くなっていることへの言及、亡くなった父母についての作品中の記述が多量だということでもあるのであろうか。そして、とくに、こうしたdataの示唆するもののうち、とくに、「母」の語の多出はみのがしえない徴

証と思われる。

4-2 「母」の語の初出例～第3例の検証

この作品の「母」の語の初出例は、第「二」章、次のような文のなかである。

①「母が帰って来たのです」と女は坐ったまま、何気なく云う。

この「母」は、そのcontextから、藤尾の母であることが明瞭である。この引用の一行の直前に、漱石の筆は、

花の香さえ重きに過ぐる深き巷に、呼び交わしたる男と女の姿が、死の底に滅り込む春の影の上に、明らかに躍りあがる。宇宙は二人の宇宙である。脈々三千条の血管を越す、若き血潮の、寄せ来る心臓の扉は、恋と開き恋と閉じて、動かざる男女を、躍然と大空裏に描き出している。二人の運命はこの危うき刹那に定まる。東か西か、微塵だに体を動かせばそれぎりである。呼ぶはただごとではない。呼ばれるのもただごとではない。生死以上の難関を互の間に控えて、寥然たる爆発物が抛げ出されるか、抛げ出すか、動かざる二人の身体は二塊の焰である。

「御帰りいっ」と云う声が玄関に響くと、砂利を軋る車輪がはたと行き留まった。襖を開ける音がする。小走りに廊下を伝う足音がする。張り詰めた二人の姿勢は崩れた。

というくだりを描いている。小野と藤尾のふたりに、まさに、なんびとかが後ろ指を指すような事態かも知れぬものへの刻々の進行を母の帰宅が禦ぎとめていることが知られる。したがって、このばあい、この「母」は、誤りなく、この文学場の進み行きに規制をかける存在と解される。いま、ひろく作品全体を見渡すとき、総じて、この母の存在は、この第一例にみるように、この作品の総体的な進み行きを支えていると解されるのである。つまり、この「母」は、相応の役割を示して作品の叙述のうえに明確な実在を刻印しているといえる。

そして、この「母」のこの作品における第2例は、つぎのように登場している。

②「まあ御緩くりなさい。母が帰っても別に用事はないんですから」と女は帰った人を迎える気色もない。男はもとより尻を上げるのは厭である。

さきに張り詰めた事態のなかにたしかな「実在」を示した、同じ「母」は、ここにおいて、実の娘の思念のうえにはこのような軽量をもって、つまり「不在」に近い存在として扱われているとみとめられる。母が示した、さきの重みは、実娘藤尾のこのころのうちにおいて反転したありようをみせている。したがって、帰宅したことによって張り詰めた事態を打ち破った重みと、いっぽう、腰を上げて迎える姿勢さえない軽みとは、一読のうえに、ちいさからぬ矛盾とみえる。しかし、詳細に考えを進めれば。前者の重みは、もともと、母の帰宅には限定されないはずであることが知られる。かりに兄の帰宅でも、また、親しく

もない人の来訪であっても、まったく同様である。声を立て、音を挙げ、ふすまを開かせ、ふたりの緊迫を極めた場の進行をうちやぶるものの出現であれば、同様であったはずである。母の帰宅も、そのうちのひとつの事態の出来にすぎないものであって、やはり、これも、ほんらいが重いものであったとはいえないと知られる。小野にはもとより、藤尾の心理において、この実母に向かう vector は僅少である。

その第3例は、つぎのようなくだりに登場している。

③「甲野君がどうかしたんですか」と小野さんは始めて口らしい口を開いた。「いえ、あなた、どうもわがまま者の寄り合いだもんでござんすから、始終、小供のように喧嘩ばかり致しまして——こないだも兄の本を……」と御母さんは藤尾の方を見て、言おうか、言うまいかと云う態度を取る。同情のある恐喝手段は長者の好んで年少に対して用いる遊戯である。「甲野君の書物をどうなすったんです」と小野さんは恐る恐る聞きたがる。「言いましょうか」と老人は半ば笑いながら、控えている。玩具の九寸五分を突き付けたような気合である。「兄の本を庭へ抛げたんですよ」と藤尾は母を差し置いて、鋭い返事を小野さんの眉間へ向けて抛げつけた。御母さんは苦笑いをする。小野さんは口を開く。「これの兄も御存じの通り随分変人ですから」と御母さんは遠廻しに棄鉢になった娘の御機嫌をとる。「甲野さんはまだ御帰りにならんそうですね」と小野さんは、うまいところで話題を転換した。

玩具ながら、きらりとひかる九寸五分をのどもとに突きよせたいいきおいをはねとばすようないきなりの「鋭い返事」、「兄の本を庭へ抛げたんですよ」という藤尾のことは、ここでも、親という立場の優位のようなものを逆転し、母親の気合をへし折り、これに苦笑を導く。そして、小野を開口に至らしめる。母を差し置く藤尾の振る舞い、言動の力は、明治の世の尋常な母子関係をはるかに超越しているとみられる。そこに、紫の女のありよう、面目は躍如としてい、したがって、その分、実母のありようは「不在」とも言い得そうである。佐々木氏の論の「母の不在」「父の不在」は、この作品のばあい、甲野の実母、実父、小野の父母、また宗近の母、小夜子の母についての指摘であるが、さらに頻出する藤尾の母についても、あくまでも実娘にとっては、その意味で母の存在感は、(実の娘ゆえに、)希薄なのだといえるのかも知れない。

藤尾のこのような性向、心情の傾きをたしかめるとき、小野清三が井上小夜子、また井上孤堂の希望・期待のとおりかりに井上家との縁組を決めたとしたとき、その結婚の第一の理想的な相手たる詩人を失った藤尾が内なる応分のあきらめをもって、また同時に、親同士の許婚の理由をもって宗近一との結婚を望むとはとうてい思われないういきおいである。作品のありようは、読み手のそのような推測を色濃く支援して余ることが明らかである。かりにその母たる謎の女がその夫の望みを優先しようとしたところで、その娘がそれによって母にしたがうありようはなかったはずだと考えられるである。親、特に父親の決めた結婚にしたがうのが明治の世の尋常だとするなら、藤尾のいきおいは、この点でも、

とうに、明治を超越してしまっているはずである。

謎の女であるこの母は、自らのゆく末にかかわる利害のみを優先して甲野欽吾の世話になることを一途に避けようとする。そのいっぽう、その娘の藤尾はその許婚者との結婚を忌避するというあきらかさにおいて、ともにこの時代の、おそらくは普通の、規範的な女性のありさまをおおきく逸脱する、いわば新しい姿を見せているといえる。この作品構成において、漱石は、そういう新しさ、やがて訪れる世における尋常の首尾をこころよく許さなかったといえる。後年、作者がこの作品のありようを悔いたところには、あるいは、そういう一側面もかいまみられるのかも知れない。

4-3 「母」の第4例～第9例の検証

「母」の第4例は、第「三」の章に至って、甲野君の会話のなかに登場する。

「しかしそりゃ、いかん。第一叔母さんが困るだろう」

「母がか」

甲野さんは妙な顔をして宗近君を見た。疑えば己にさえ欺かれる。まして己以外の人間の、利害の衝に、損失の塵除と被る、面の厚さは、容易に度られぬ。

ここには、甲野欽吾のこころのなか、自分が家を継がなくてもいっこうに困らない、それどころかそれによって安穩と利便を得るはずの母が誤りのない眼で批評されている。藤尾の実母は、即ち、欽吾の継母であり、欽吾にとって、この母はただの不在よりもなおマイナスに傾く存在と確認される。欽吾の実母はとうに不在であり、その位置に代替するこのような継母の存在あればこそ、この作品が滞ることなく、特質的な構造をとって展開するのである。

この箇所の次行を記す漱石の筆は、「母」の第5例を、また、そこに「継母」⁵⁾ という語を導きながら、

親しき友の、わが母を、そうと評するのは、面の内側で評するのか、また外側でのみ云う了見か。己にさえ、己を欺く魔の、どこにか潜んでいるような気持は免れぬものを、無二の友達とは云え、父方の縁続きとは云え、迂闊には天機を洩らしがたい。宗近の言は継母に対するわが心の底を見んための鎌か。見た上でも元の宗近ならばそれまでであるが、鎌を懸けるほどの男ならば、思う通りを引き出した後で、どう引っ繰り返らぬとも保証は出来ん。

このように記し、次下、その第6例を、

宗近の言は真率なる彼の、裏表の見界なく、母の口占を一図にそれと信じたる反響か。平生のかれこれから推して見ると多分そうだろう。

また、第7例を、

よもや、母から頼まれて、曇る胸の、われにさえ恐ろしき淵の底に、詮索の錘を投

げ込むような卑劣な振舞はしまい。けれども、正直な者ほど人には使われやすい。

第8例を、

卑劣と知って、人の手先にはならんでも、われに対する好意から、見損なった母の意を承けて、御互に面白からぬ結果を、必然の期程以前に、家庭のなかに打ち開ける事がないとも限らん。いずれにしても入らぬ口は発くまい。

このように続けて、そのことを判然と示して行く。

「母」の第9例は、やはり、宗近君と甲野さんの会話のうちに登場している。

「御糸さんが嫁に行くと御叔父さんも困るね」「困ったって仕方がない、どうせいつか困るんだもの。—それよりか君は女房を貰わないのかい」「僕か—だって—食わす事が出来ないもの」「だから御母さんの云う通りに君が家を継いで……」「そりゃ駄目だよ。母が何と云ったって、僕は厭なんだ」「妙だね、どうも。君が判然としないもんだから、藤尾さんも嫁に行かれないんだろう」「行かれないんじゃない、行かないんだ」宗近君はだまって鼻をぴくつかせている。

煙草を嗜み、しばしば「八の字を寄せる浅黒い額」の、「ホホホホ」と笑う継母への、甲野欽吾の眼差しは一定である。表面だけをながめても、この「母」のことは欽吾の心にかかわることはない。かたちの上でも実の上でも母は不在である。このように、『虞美人草』に多数のdataをしめしていたの「母」の語は、そのおおよそが、しばしば「御母さん」と呼称され、また自称されところの藤尾の実母の謂いであり、その特色的なありようは、これよりのちのくだりにも、まったく同様の存在のありようを示しているである。つまり、第「十二」章に、

欽吾はわが腹を痛めぬ子である。——謎の女の考は、すべてこの一句から出立する。この一句を布衍すると謎の女の人生観になる。人生観を増補すると宇宙観が出来る。謎の女は毎日鉄瓶の音を聞いては、六畳敷の人生観を作り宇宙観を作っている。人生観を作り宇宙観を作るものは閑のある人に限る。謎の女は絹布団の上でその日その日を送る果報な身分である。

……幸と藤尾がいる。冬を凌ぐ女竹の、吹き寄せて夜を積る粉雪をぴんと撥ねる力もある。十目を街頭に集むる春の姿に、蝶を縫い花を浮かした派手な衣装も着せてある。わが子として押し出す世間は広い。晴れた天下を、晴れやかに練り行くを、迷うは人の随意である。三国一の婿と名乗る誰彼を、迷わしてこそ、焦らしてこそ、育て上げた母の面目は揚る。海鼠の氷ったような他人にかかるよりは、羨ましがられて華麗に暮れては明ける実の娘の月日に添うて墓に入るのが順路である。

と記されるこの母の行く道は固く定まっていて、尋常なことがらによっては、とうてい覆りようのないありかたである。それゆえ、紫の女ともども、この作品の始末において、作

者の筆が、これに掣肘を加えざるをえないゆえんである。

4-4 第10例めの「母」——小野清三の暗昏

しかし、この作品の第10例めの「母」は、この甲野家の描きを離れ、これまでとおおいに趣を異にしている。第10例の「母」は、

絢爛の域を超えて平淡に入るは自然の順序である。我らは昔し赤ん坊と呼ばれて赤いべべを着せられた。大抵のものは絵画のなかに生い立って、四条派の淡彩から、雲谷流の墨画に老いて、ついに棺桶のはかなきに親しむ。顧みると母がある、姉がある、菓子がある、鯉の幟がある。顧みれば顧みるほど華麗である。小野さんは趣が違う。自然の径路を逆しまにして、暗い土から、根を振り切って、日の透る波の、明るい渚へ漂うて来た。——抗の底で生れて一段ごとに美しい浮世へ近寄るためには二十七年かかった。二十七年の歴史を過去の節穴から覗いて見ると、遠くなればなるほど暗い。

と叙述される。第一例から第9例までの「母」から一転して、ここには、藤尾を得ることを第一義として望む小野の暗昏の境涯が端的に描かれている。今は失っていても、欽吾にも、宗近にも、顧れば、「母」は想起することができる存在である。しかし小野には、いくらたんねんに顧みても、その生の根本から母が不在なのである。父のありようもそれにとおくないと憶測される。

脳科学の知見によれば、2歳ごろまでの記憶を人は持ち得ないものなのだという。海馬の部位の発達に連動、起因するものようである。そのころまでに小野が実母を失っていた事情は作品中の何処のくだりにも、説明されることがない。事故やら病気やらによる死であるなら、あるいはそう聞かされてでもいるのなら、ふれあいの記憶のない母へも、情は、相応に感傷をもってたちはたらくことがあるかもしれない。小野の母は、それよりももっといちじるしい過酷さで、空白なのである。継母、継父だに持たなかった小野が、唯一の縁に比し得るのは、井上孤堂ただひとりであることは明瞭である。

のちに小野の本心を受けた浅井が小野の使いとして井上孤堂を訪れ、小夜子との結婚の話無しにしてほしい、ついては長く世話になったことだから、今後物質的な援助をしたいと申し伝えたとき、孤堂は「小野の世話をしたのは、泣きついてきて可愛想だから、好意づくでした事だ。」「何だ物質的の補助をするなんて、失礼千万な。」とって憤慨し、やがて、浅井に向かって「小野にそう言ってくれ。井上孤堂はいくら娘が可愛くっても、厭だという人に頭を下げてもらってもらうような卑劣な男ではないって。——」と言い放ち、そのいっぽう、「小夜や、おい、いないか」「そう返事をして差し支えないだろうね」と小夜の心中を気遣っている。

頼りどころなく泣きついてきた可愛想な者への人の思いは、損得の判断を離れた自然な情である。「卑劣な」は、このばあい、この稿の筆者にとってはいかにも受容の難しい言

であるが、すくなくとも、厭だといいはる人の情へ、「それでも」とぶら下がる不自然は持ち合わせていない、というところねの表出であると感じられる。まして、金で償えとは思ひもしない。しかし、そういうところねを、小野は、とうてい持ち合わせていない。その母からも、父からも、譲り受けていない。

小野は、すなわち詩のうちに誠と真とをおきまどう小野は、そのとき、そういうひとのころのほんもの、大切に重い、ただひとつの縁をも断ち切ろうとしていたことになるはずである。

ここには、現在時点に合わ「実母の不在」はあきらかでも、顧みることによって、追い感じることでできる存在はほんとうの不在ではないとさえとらえるべき実質のようなものが、小野の存在の対極としてとらえられる。

そして、このことに思い合わせられるのは、『硝子戸の中』である。周知のように『硝子戸の中』には、父母に関するいくつかの記事がある。誕生直後に里子にやられた漱石すなわち夏目金之助でも、また、十三、四の時に亡くしているけれど、想起せば、そこに懐かしい母を感じられるのである。その「二十九」には、「私は両親の晩年になってできたいわゆる末^{すえ}子^こである。私を生んだ時、母はこんな年^{とし}齢をして懐妊するのは面目ないと云ったとかいう話が、今でも折々^くは繰^{かえ}返されている。……浅草から牛込^{うづ}へ遷された私は、生れた家^{うち}へ帰ったとは気がつかずに、自分の両親をもと通り祖父母のみと思っていた。そうして相変らず彼らを御^お爺^{じい}さん、御^お婆^{ばあ}さんと呼んで豪も怪しまなかった。向でも急に今までの習慣を改めるのが変だと考えたものか、私にそう呼ばれながら澄ました顔をしていた。」といい、金之助は、その「三十七」で、

母は私の十三四の時に死んだのだけれども、私の今遠くから呼び起す彼女の幻像は、記憶の糸をいくら辿って行っても、御婆さんに見える。晩年に生れた私には、母の水々しい姿を覚えている特権がついに与えられずにしまったのである。

といいながら、その「三十八」で、「悪戯で強情な私は、けっして世間の末^{すえ}子^このように母から甘く取扱われなかった。それでも宅中で一番私を可愛がってくれたものは母だという強い親しみの心が、母に対する私の記憶の中には、いつでも籠っている。」と語っている。漱石が母を語ろうしたくだりを、そのまご夏目房之介氏は、「これらの記憶は漱石にとってかけがえのないものだったに違いない。まるでさわると壊れるほど小さな細工のいちぐんをそっと取り出すかのように、母の挿話は語られる。」と記している。ここには、血縁につながる人のやさしい懐かしみが感じられるように思われる。『孫が読む漱石』（実業之日本社、2006、2、20）。

さきにふれたように、『虞美人草』の「母」はそのおおよそが藤尾の実母である。すなわち、利の為に偽をはばからぬ欽吾の継母である。藤尾の死に至り、小野が改心するというそのあらたな展開への進行のなかに、藤尾側の人はいずれも（ふたりとも）負の存在であり、藤尾の実母はその不正義の仕掛けとの役割を負っている。欽吾が「僕の母は偽物だ

よ。君らがみんな欺かれているんだ」ともらすのは、作品のあらたな展開に向けて、欽吾にしか見えない真実であった。

この作品の世界は甲野欽吾その人はもちろん終始正の存在であるが、その欽吾も、宗近兄妹も井上小夜子もだれも、佐々木氏のさきの指摘のとおり、たしかに、ひとしなみに、母の不在を示していた。

おおかたの「父」「母」の不在状況のなかにあって、負の側にのみ母が在って、それが多出して、作品の進行を支え、この作品世界の形成に関してゆくのである。そして、この母は、欽吾の継母にして、藤尾の実母という、二様の役割をきわめて実質的、具体的に果たしている。この作品の執筆中の明治40年7月19日に、小宮豊隆にあてた書簡のなかで、漱石は『虞美人草』は毎日かいている。藤尾という女にそんな同情をもってはいけぬ。あれは嫌な女だ。詩的であるが大人しくない。徳義心が欠乏した女である。あいつをしまいに殺すのが一篇の主意である。うまく殺せなければ助けてやる。しかし助かればなおなお藤尾なるものは駄目な人間になる。最後に哲学をつける。この哲学は一つのセオリーである。僕はこのセオリーを説明するために全篇をかいているのである。だから決してあんな女をいいと思っちゃいけない。小夜子という女の方がいくら可憐だかわかりやしない」と語っている。ここでは、藤尾のありように焦点を求めているはするけれど、しかし、我の女のかたわらにあって、こころを隠したてて、ことばたくみに外交するこの母の存在がなかったら、この物語はその基盤から劇的構造を失う。

そうした出現の仕方であることを確認すれば、「父」と比べて格段な「母」の語の多出は負の側に偏在して作品の進行バランスをつくり出していたといえる。やがて、急転直下、実娘を失って行き場を閉ざしたこの偽者の母が改心の情を表明することでこの作品は閉じられるけれど、この母のこころは、こののち、どのような道に出、どう歩みを重ねるべきものなのであろうか。つまり、守り通すべき実母の位置を失い、忌避し続けたはずの継母の道のみを得ることになったこの母の進路は、いくら改心の誓いを示したとしても、哲学者と家庭的の女の作りなす家庭のうちの継母、義理母なる存在として、これとどうかかわって生きてゆくのであろうか。この家族形成のうちに、応分の居所を持ち得、保ち得るものであろうか。

いくら明治の世でも、人の生涯はそう短くはない。安易に都合のいいこま切れを生きているのでもない。文芸のうちの個は、語りの持続のうちにさえ瞬時を生きれば、その後を問われることを免れるぶん、きわめて、安楽である。

〔2010. 7月8日 成稿〕

〔2010. 9月17日 研究所事務担当宛提出〕

注

- 1) 『日本国語大辞典』初版、第二版、精選版 昭和四十七年十一月～刊行、小学館。
- 2) 「上篇」明治38年10月、「中篇」明治39年11月、「下篇」明治40年5月刊行（大倉書店・

服部書店)。

- 3) 青空文庫本文にしたがって、語例を検索。その作品は、次下のとおり。『薙露行』、『倫敦塔』『吾輩は猫である』『坊っちゃん』『草枕』『虞美人草』『三四郎』『それから』『門』『彼岸過迄』『行人』『ころ』『道草』『明暗』。
- 4) 青空文庫本文にしたがって、語例を検索。その作品は、次下のとおり。『舞姫』『文づかひ』『半日』『キタ・セクスアリス』『青年』『雁』『かのように』『阿部一族』『安井夫人』『山椒大夫』『最後の一句』『洪江抽斎』。
- 5) この「継母」の語は、この『虞美人草』の本文中にただ一例認められる。なお、この語は漱石生涯の全小説作品中に、ただ5例のみ認められる。他の4例は、『ころ』『各輩は猫である』『彼岸過迄』。

付記。この稿は、二カ年間のプロジェクト期間終了直後にとりくんだdataの整理と分析にもとづいて、2010年5月初旬までに執筆を了えた論考のうちの一部を、本報告の紙幅に合わせて、簡略に取りまとめ、上記の日程に完成をみたものである。なお、dataの整理に限定して3人の学生の作業役務を得たが、このうちの1人については、dataの処理に著しい遅延と杜撰が確認され、またみずから申し出た作業日程にも大幅な遅延を引き起こしたため、急遽、その補填作業のためにあらたに、本学卒業生1名の助力を得た。dataだけをあつかう面倒な整理の作業に援助を惜しまなかったこれら3人の名を記して、感謝の意をあらわしたい。石川真衣・丸山由貴・水上比呂美。

Research on Soseki in Texts of his Literary Works from the Viewpoint of Family

Kazuo OKAZAKI

This paper describes a comparative analysis of the words “chichi” and “haha” (father and mother) contained in the Japanese literary works of Natsume Soseki and Mori Ogai. Focusing on the lexical data to discuss the new argument about family in texts of both novelists. The results of this investigation indicate a clear distinction in the frequency of occurrence of these particular lexical items.

The author goes on to explain a possible reason for this distinction and the difference between Soseki and Ogai in texts of their literary interests and attributes.

Keyword : Family, Soseki, Ogai, Gubijinsou
